座 談 会

図書館と連携した学部教育
――中京大学国際英語学科 Graded Readers の場合――

村上康廣　（豊田図書館事務室課長）
Richard Morrison（国際英語学部国際英語学科助教授）
James D'Angelo（国際英語学部国際英語学科助教授）
司会　福吉瑛子　（国際英語学部国際英語学科教授）

はじめに

福　　吉：私は昨年(2004)12月に、図書館の中河原事務室長に、次の『中京大学図書館学紀要』に何か書いてもらえないかと頼まれました。大変忙しくはあったのですが、図書館にはいつもお世話になっていますので、何か出来ることはないかと考えました。そして、図書館と国際英語学科といえば Graded Readers だと思い、図書館の職員の方と国際英語学科の教員との合同で、この Graded Readers について座談会を行い、それを記事にしてもらえたらと思いました。中河原室長は、それは新しい試みだと言ってくださり、私も国際英語学科は何でも新しいことに挑戦する学科なので、やってみることに致しました。

今日の座談会は日本語と英語とで行いますが、私がテープ起こしをする時には全て日本語にさせていただきます。

Graded Readers の取り組み

福　　吉：さて、一般的にどこの大学の先生でも、学生たちに、「図書館に行って本を読みなさい」とはいうのでしょうが、授業の課

題として足しげく図書館に通い、本を借り出し、それを読みあげ、授業でそれについてディスカッションするという取り組みをしている大学は少ないと思います。しかもそれを英語の教材として取り組んでいる大学はそう多くはないと思います。モリソン先生、他にどこかの大学でこのGraded Readersに取り組んでいるところを知っておられますか。

モリソン：固有名詞では今挙げられませんが、いくつかあります。仙台にも、京都にもそういう大学はあります。

福　　吉：そうしますと、もしモリソン先生が、うちの学科のGraded Readersの取り組みを学会で発表しますと、大きな関心を呼ぶと言えますか。

モリソン：英語教育に関する学会の全国大会などでは、毎回Readingのシンポジアムがいくつか開かれ、多くの参加者を集めていますが、その発表の多くは、まだ、Graded Readersを取り入れ始めたという段階の話にとどまっています。

福　　吉：そうしますと、モリソン先生などが、中京の国際英語学科ではもう既に4年以上の実績があるという発表をされると、ずいぶん色々な大学の参考にもなるということですね。

モリソン：その通りです。ですが、このGraded Readersの取り組みは、今全国で急速に広まってきており、おととしのこのセットの日本国内の売り上げは、前年比400％増だそうです。

福　　吉：すごいですね。従来、教育法とか教育実践の話では、英会話はもちろん、Listening教授法とか、Writingの授業報告とかはたくさんありましたが、Readingについてメソッドをもって、あるいは戦略、すなわちStrategyをもってReadingの授業に取り組んでいる大学はまだまだ少ないのではないでしょうか。

中京大学国際英語学科が、このようなユニークな教授法

を、既に4年以上もやってきていることは、まだ中京大学の中でも、あるいは外の大学でもまだしっかり認識されていませんので、今回の座談会でとりあげようと思ったわけです。

モリソン先生、そもそもこれをスタートさせたのはいつ頃だったでしょうか。

モリソン：英文学科時代に1年(2001)、国際英語学科になってから半年(2002)のトライアル期間がありました。

福　　吉：モリソン先生とダンジェロ先生が、いよいよ Penguin や Oxford University Press から大きなダンボールでこのセットを購入する時までには、最初にどのようなきっかけがあったのでしょうか。

モリソン：2000年に、国際英語学科が、中京大学に、大学英語教員用の研修集会を招致した時、ノートルダム清心女子大学の Dr. Rob Waring がこの Graded Readers の研究発表を行い、私は大変感銘をうけました。そこには Oxford University Press の営業の人も来ており、私はそういう人たちと更に話を深めて、中京でも取り組もうと思いました。

LSC での受け入れ

モリソン：そこで最初にやったことは、LSC（Library Service Center）に出向いて、当時の LSC のセンター長でいらした村上さんにお会いして、図書館として協力してもらえるかどうかをお聞きしてみることでした。

福　　吉：モリソン、ダンジェロ、福吉の3人で村上さんを訪ねましたね。2000年度だったと思いますが。このセットは、当時の図書館の本としてはまあ異例なものだったと思うのですが、図書館の村上さんとしては、どのようなお考えで引き受けて下さろうとなさったのでしょうか。

村　　上：図書館としては、原則としてLSCには洋書は入れないという方針がありました。洋書は１号館の本館図書館に入れることになっていました。しかし講義と結びつけて学生の図書利用をはかるという提案自体は、図書館としてもいいことだと思いました。

福　　吉：スタート当時は、タイトル数にして404、それが各３～４セットあったわけですから、総冊数にすると1500冊を越えていたと思います。これだけの冊数を一度に受け入れるという作業についてはどうだったのでしょうか。

村　　上：受入の担当者と、洋書整理の担当者に相談し、理解を得ることができました。

福　　吉：皆さんもこの図書の教育的意義を理解して下さったということなのですね。

村　　上：そうだと思います。ただどういう風に整理したらいいかについて考えてもらいました。

モリソン：あれだけの数の本に、登録番号をつけ、シールを貼り、分類までしていただいたのですから大変だったと思います。どこの大学でもペーパーバックなので表紙がよれよれになると言っていますが、中京大学図書館では、１点１点、ラミネートを貼って表紙を補強してくれました。

福　　吉：或る短大では、誰かがやりかけて部分的に購入したはいいが、それらはそのまま打ち捨てられて、ダンボールにほこりをかぶっていると聞いたことがあります。また学会で出会った或る大学の先生は、ひとりで率先してやってみたのだけれど、もうそれだけで全ての時間を消耗したのでやめたと言われました。中京ではすべての管理は図書館がやってくれていると言いましたら、大変うらやましがられました。

モリソン：或る短大では、先生たちがペーパーバックを持ち寄って、学

生たちに自由に貸し出ししているところもあります。

福　　吉：でも手続き無しでは、本が紛失したりしますね。

ダンジェロ：それに、中京のように、貸し出しのデータもとれませんね。どの本がどのように貸し出されているのかを数字で知るのは大事なことです。

学生は何を読んでいるか

福　　吉：図書館では、毎月、前月の貸し出し数の最も多かった本を、Best Readersとしてホームページに載せてくれていました。最初の頃はGraded Readersも統計の中に入れてもらっていましたが、毎月このReadersがトップリストの全てを埋めていましたね。最初はPenguinのシリーズが249タイトル、Oxfordが131タイトル、Cambridgeが24タイトルでしたので、Best Readersもイギリス文学ものが多かったですね。

ダンジェロ：『赤毛のアン』とか『ポカホンタス』など、アメリカ、カナダのものもありましたよ。

福　　吉：例えば2002年度前期のBest Readersによく挙がった作品をみてみますと、Fictionものとしては、*Alice in Wonderland*、*Anne of Green Gables*、*The Little Princess*、*Sherlock Holmes*、*Robinson Crusoe*、*Tom Sawyer*などですが、Non-Fictionものは、*Audrey Hepburn*、*Agatha Cristie: Woman of Mystery*、*The Life and Times of William Shakespeare*、*The Elephant Man*などです。学生の本の選択について、何かご意見はありませんか。

モリソン：本の選択は学生によってさまざまです。例えば去年、或る学生は、イギリスに関する本ばかり読んでいましたが、この学生は結局次の年イギリス研修に行くことになりましたね。

授業で、学生たちは、自分が読んだ本について理由をつけて推薦したり、推薦しない場合もその理由を述べたりしなけ

ればなりません。多くの学生の作品選択の動機は、友達が推薦したということなのです。

このBest Readersのリストの当時は、Fictionものが多く入荷していましたが、その後Non-fictionものも多く購入しましたので、今はまた違ったデータが出ていると思われます。

福　　吉：学生たちは、Fictionよりも Non-fictionの方を好んでいるようですか。

モリソン：それは学生によります。Fictionが大好きな学生もいますし、Non-fictionばかりを選ぶ学生もいます。

ダンジェロ：最初に購入した作品はFictionものが多かったので、２年間Fictionものを読んできていた学生は、Fictionものに飽きてきていたと思います。だからその後Non-fictionものが入ってきた時、学生たちはそれに飛びついたと思います。

福　　吉：トータルにいうと、学生が選ぶ本のFictionとNon-fictionの割合はFifty-fiftyだと思いますか。

モリソン：そろえてある本の冊数からいって、Fictionものの方が多数を占めています。

福　　吉：私がもうひとつ興味を持っているのは、学生たちは、あれだけたくさんの作品の中から一体何を選んでいるのだろうかということです。もちろんレヴェル上の制約はありますが。特に私は「イギリス文学研究」などの授業を持っていますので、学生たちがどのように文学作品を読むのかということに注目しているのです。

学生たちは、皆大変忙しい生活をしていますので、文学作品の世界に没頭するとか、想像力や集中力でもって別の世界にひたるということが難しくなっています。それで学生たちはNon-fictionばかりを選ぶのかなと思っていましたが、そうではないのですね。やはり適当なバランスをとって作品をそ

ろえてやると、学生たちもバランスよく選択するということがわかりました。

ダンジェロ：このセットが、Fiction も Non-fiction も全て一箇所にまとまって配架されていることは大変いいことですね。

村　　上：現在は全て、835番台の棚にまとめて配架されています。最初はいちばん奥に使用していないスペースがあったので、そこに配架してスタートしました。

福　　吉：その後835番台の棚に移りましたが、私個人は、以前の場所の方が明るいし、何か特別のコーナーという感じがして良かったようにも思います。

ダンジェロ：いずれにしても、一箇所にかたまってあることが大事です。Fiction と Non-fiction が別々に配架されるということでは困ります。

モリソン：これは作品の内容で分類されるものではなく、英語学習のために必要なセットとして、英語学習用の835番台に一括分類される必要がありました。

　話は戻りますが、最初スタートした直後、LSC に行きましたら、村上さんも机に向かってこの中の１冊を読んでいらしたのを目撃しましたよ。

福　　吉：村上さんも、あれだけ学生たちがたくさん借りて行きますと、どんなものなのか、やっぱり読まれますよね。

村　　上：ええ、*Wuthering Heights*（『嵐が丘』）をね、日本語訳のものしか読んでいませんでしたのでね。

福　　吉：*Wuthering Heights!* あれはレヴェル５かレヴェル６ですよ。

村　　上：ああ、そうですか。でも筋を既に知っていましたから、辞書を頼りになんとか読んでいくことができましたね。

福　　吉：私も時々何冊か借りるのですが、ちょっと難しい単語に、多分学生だと思うのですが、鉛筆で薄くアンダーラインが引い

てあったり、お茶をこぼした染みがあったり、本がよれよれに柔らかくなっていたりして、ああ、みんなこれを借りて読んだのだなと思えることが嬉しいですね。

読書力のレヴェル・アップをどうはかるか

ダンジェロ：Graded Readers と原作とを比較することも大事だと思うのですが。

福　　吉：教員の中には、特に文学を専門にされる先生の中には、Graded Readers について、とんでもない、あれは文学ではないと懸念される方もいました。学生たちが、あんなに易しく書き換えたものを読んで、これで『嵐が丘』を読んだなどと思ったら大間違いで、文学の香りも味もしないものを与えること自体が間違いだとさえ言われる向きもありました。モリソン先生、４年間の経験から、このことについてはどうお考えですか。

モリソン：私自身がこのセットからたくさんのものを読み、楽しみました。最近は或るアフリカ関係のものを手にしました。登場人物が多すぎて往生しましたが。学生たちも結構楽しんで読んでいます。英語に触れるだけではなく、文化的なことや外国の人々の行動に触れることもできますから。この Readers 学習の権威である David Hill という人が、「ヴァイオリンやピアノを練習するのに、誰がいきなりヴェートーヴェンのソナタから始めるか」と言っていますが、学生たちにも同じことが言えると思います。

ダンジェロ：授業で難しい原作に挑んでも、１コマに２～３ページ位の進度で、１年間でも50ページ位しかいかなければ、結局、逆に文学嫌いにしてしまう可能性さえあります。しかしこの Graded Readers の考え方は、自然にレヴェルがあがっていけ

ば、かえって早く原作が読めるようになるというものです。果たしてそのようになるかどうかを、中京の場合も含めて今後検証していく研究が大事になると思います。JALT をはじめ、英語教育関係の学会では、共同でこのような研究を進めていこうと話しています。この分野の研究はまだまだこれからです。

中京大学国際英語学科としては、或るレヴェルの本を10冊から12冊読んだら次のレヴェルに進むよう指導しています。しかし宿題は週に１冊というと、どうしても易しいレヴェルのものを読んでしまい、先のレヴェルに進まない学生もいるので、プッシュが大事になります。

モリソン：しかし中にはすごい学生もいて、去年、シンガポール研修から帰国するやいなや、１日に３冊ずつ読み続け、秋学期が始まってからも、週に５～６冊は読んでいる男子学生もいました。気に入った作品なら２度繰り返して読んでおけば、もう少したってから原作を読むのもむずかしくないと思います。

福　　吉：ひどく難しい原作にかじりついて２，３ページで挫折する位なら、易しいので、ラストページまで読み上げ、The End を見届け、裏表紙を閉じるというこの経験は、大きな励みになるのではないでしょうか。

モリソン：今日も Reading を担当している外国人非常勤講師の先生とミーティングを行い、どうやって学生たちに次のレヴェルに進ませるかについて話し合いました。

福　　吉：レヴェルの１とか２などを借り出す学生が多いと思うのですが、レヴェルの４とか５などを借りていく学生に何か共通のタイプがありますでしょうか。

村　　上：カウンターではそこまではわかりませんね。

福　　吉：もうひとつ私が最初に期待したことは、国際英語学科の学生

がこれでよく図書館に行き付けるようになって、そのついでに他の棚からも面白い本を見つけ出したり、図書館で本を読んでいる人を目撃したりする中で良い刺激を受けてくれないかなということでした。うちの学生が、課題の Graded Readers を借り出す際、プラスもう一冊という現象がありますでしょうか。

村　　上：そういうことはよく見受けましたよ。ただそれが Graded Readers のついでだったかどうかはよくわかりませんがね。

福　　吉：『中京大学図書館学紀要』第25号（2004）に載っています「2003年度中京大学図書館年報」の統計によりますと、国際英語学部は、貸出冊数においても、貸出者数においても、全学の13%を占めていて、学部別ではどちらも全学のトップとなっています。

Graded Readers の読者の拡がり

福　　吉：私がまた Graded　Readers 導入時にもうひとつ期待したことは、国際英語学科以外の人もこれを利用してくれるだろうということでした。学科図書室ではなく、全学の図書館に置いてもらった訳のひとつはそこにありました。これについては現在どうでしょうか。

村　　上：他の学部の学生も借りておりますし、Open College の方々も借りていかれますよ。

福　　吉：Open College の学生さんたちは、どの辺りのレヴェルのものを借りていかれますか。

モリソン：それは人によりけりだと思います。

福　　吉：Open College の外国人英語教員の先生たちは、この Graded Readersについて、学生さんたちに紹介をして下さっていますか。

モリソン：国際英語学科の外国人教員は、最近 Open College で教えることが少なくなりましたが、折にふれて伝えられる限りは紹介しています。LSC は学外のどんな人にも開放されているのですから、私は事あるごとに、外部の人が来学されると、LSC のこのコーナーにお連れして自慢して見せています。

福　　吉：私も Open Campusの時には、高校生をL.S.Wing（Learning Support Wing）やマルチメディア教室などにも連れていくのですが、是非 LSC のこのコーナーもツアーに入れたいと思います。

　ところで現在学生たちは一回に何冊まで借りられるのだったでしょうか。

村　　上：現在は６冊までですが、2005年度からは10冊になる予定です。貸出期間は、開架図書の場合、学生、教員とも２週間です。

ダンジェロ：現在、国際英語学科の教員の間では、学生とたくさんの読書会を持とうという計画があります。そうなりますと、現在は３セットしかないGraded Readersの中で、何点かは、この読書会用に、同じ本が４部から６部くらい欲しくなるのですが、これは図書館として可能でしょうか。

福　　吉：授業とタイアップした指定図書というのは、現在何部まで複本が認められていますか。あの Graded Readers はいわば全て指定図書といってもいいわけですから。

村　　上：大体の目安ですけれど、５部くらいですね。

モリソン：マクミランのものなど、６部欲しい本のリストは出来ています。

村　　上：一般的に複本は、閉架に１冊、開架に１冊というのが原則ですが、そのように理由をつけて申し出られれば、特定の本の６部というのは可能だと思います。

福　　吉：大学図書館には、そのような薄っぺらいペーパーバックを６

部も入れるのではなく、1冊でもしっかりしたハードバックの洋書などを入れるべきだとの意見もありますが、これについてはどうでしょうか。

村　　上：しっかりした良い専門書を入れるというのは、大学図書館としての伝統的な考えかたではありますが、学部が挙げて取り組むということでしたらそのような購入の仕方もあるのではないでしょうか。

福　　吉：研究用の専門書は、大学院用の図書予算でも買えるわけですからね。

図書館業務の拡大

福　　吉：さて来年2005年度には、国際英語学科も4年目を迎え、学生数も4年間で400名となります。このGraded Readersは薄い小さい本ではありますが、これらの学生たちが次々と図書館に押し寄せてこの本を2冊、3冊と借り出しますと、図書館としてはかなりの作業になると思うのですがどうでしょうか。

村　　上：確かにそうですが、これはまあ、貸出・返却・配架という図書館の基本業務ですから、たとえその数が増えてもやるということです。

福　　吉：或る館員さんに、このコーナーが出来てからお昼を食べる時間が短くなったと言われて恐縮したことがありましたが、ありがたいことだといつも感謝しております。ただ国際英語学科の学生が、たとえたった10分の滞在時間でも、大勢LSCを訪れ、4階に上ったり下りたり、借りたり返したりしていることが、少しは図書館の雰囲気を活気あるものに変えているのではないかと思っているのですが。全体の数からしたら、そんなに目立つという程ではないでしょうか。

村　　上：私がLSCにいた2年前までは、そんなに意識しませんでした

が、現在は多くの利用者が集中して目立っているそうです。

福　　吉：モリソン先生、最後に何かおっしゃりたいことはありませんか。

モリソン：ただただ図書館の皆さんに深い感謝の気持ちを表したいと思います。本が到着した時から、全ての本に登録番号とバーコードをつけて下さり、わざわざ1冊ずつ補強用のラミネート表紙を貼り付けて下さいました。表紙がよれよれになることがどこの大学でも苦心していることなのですが。その上、こちらから言わないのに、薄い本が倒れないように、プラスチックの仕切りをたくさん入れて下さいました。それに貸出業務と、返却本を元の棚に戻す業務は大変な作業量だと思います。でもそのおかげで、学生たちは現在いつでも自由に借り出すことが出来ています。

私は中京大学に赴任してからずっと、学生たちが授業以外で何とかしてもっと英語に触れるように出来ないかと考えてきました。本を使えばそれが出来ると思ってきました。実際学生たちは、教室以外のさまざまな場所でこの本を読んでいます。

福　　吉：例えばどんな場所ですか。

モリソン：もちろん家とか、地下鉄やバスの中とか、地下鉄のホームとか、台湾旅行に携帯したという学生もいますし、トイレの中という学生もいます。

福　　吉：私の経験からいっても、このシリーズは、地下鉄を待っているホームというのが一番集中できますね。わずかの乗車時間という、いわば捨てたような時間が生きるのです。

おとといも、オーストラリア研修に行く2年生を見送りにセントレア空港にいきましたら、或る女子学生が、同じく見送りにこられた吉川主任教授に、Oxfordの一冊を差し出して、「先生、これ、図書館に返しといてくれへん？」なんて頼

んでいるのでびっくりしましたが、国際英語学科の学生はこのように常に何冊か図書館の本を借りているのだなとも思いましたね。

村　　上：そういうことは図書館としても嬉しいですね。やはり図書館の役割を果たしていることになりますからね。確かに業務は増えますが、それは対応できないものではありませんし、忙しくはなっても、学生が大いに図書館を利用して、自分の勉学に役立てているというのは、図書館の喜びでもありますからね。

図書館と学部との連携

福　　吉：本館には自習室がありますが、LSCにはありませんね。本館の自習室はガラス張りになっていますが、もしLSCにもガラス張りの自習室があって、先ほどの話の読書会のように、何人かの学生がみんな同じ本を持って、ディスカッションをしながら一緒に読んでいるのが外からも見えたりしたらいいだろうなと思うのですが。図書館の或るコーナーにそういう部屋が3つ位並んでいて、どの部屋も埋まっていたりしたらいいのにと思います。本は日本語の新書でも何でもいいのですが。

卒論のゼミでも、学生をLSCに連れていって、90分でひとり3冊は卒論に関係する本を探し出して借りてきなさいという指示をすることがあります。最近の学生は何でもホームページがあればいいと思っているふしがありあすので。そういう時学生たちは本当にいい本を借り出してくるのですが、そういう話のやりとりも、自習室がありませんので、LSCの片隅で、ひそひそ声でやるしかないのですね。或る時は「LSC自習室でゼミをやります」と言えて、皆がその自習室を

出たり入ったりして、お互いに今借りてきた本の紹介などが出来たりしたらいいのにと思います。

福　　吉：私は海外研修でイギリスのサリー大学に学生を連れていった時も、現地の先生にお願いして、サリー大学の図書館から1冊本を借り出し、その本について授業でプレゼンをさせてくれるようお願いをしました。帰国までに必ず返却するよう指導するのが大変でしたが。そういうように、大学時代に図書館にいく生活をしていれば、卒業しても行くでしょうし、海外に行ってもその国の図書館を訪れたりすると思います。Concert-goerといって、コンサートによく行く人ということばがありますが、学生たちがLibrary-goerになってくれたら、それはとてもリッチなことですよね。

ダンジェロ：それはとてもいいまとめですね。とにかくこのプログラムを実現してくれたモリソン先生にも感謝しなくてはなりません。

モリソン：いえいえ、これはみんな中京大学図書館の皆さんのおかげです。

福　　吉：先日或る外国人非常勤講師の先生が、「モリソン先生は、或る時は妥協するけれども、或る時は絶対妥協しないで、みんなが無理だと思ったことでも、言い続けて、やり続けて、周りの人もいつの間にかそれに協力するようになってきていることに感謝します」といっておられました。こういうように、教員が本気で学生のために動いた時は、中京の事務職の人は、本当によく協力してくれますね。

村　　上：図書館と学部の連携は、本当に今後も強くしていかなければいけないと思いますね。

図書館によるゼミガイダンスなども今後重視していきたいと思っています。図書館を利用する方法もわからないまま過ぎるということがないように、入学時だけでなく、上級学年

になってもガイダンスをしていきたいですね。そうして先生方と図書館とが連携できれば、図書館も発展するし、学生諸君の勉学にもプラスになると思います。

福　　吉：私も英詩の授業で、図書館から William Blake の版画集などを借り出して学生に見せたりするのですが、その本の価値をいろいろ言ってもピンとこないようなので、「この本は15万円もするのよ」というと「ホーッ」と驚いています。さらに、「みんなもこれを借りられるのよ」というとまた驚いていますね。

村　　上：実はここ4年間の LSC の貸出冊数が、すごい伸びを示しているのです。2001年度の貸出冊数は30,875冊でしたが、翌年、国際英語学科の Graded Readers が本格的に始まった2002年度には40,050冊となり、実に3割増しになりました。その次の2003年度は44,859冊で前年の1割増しです。さらに今年2004年度では、12月現在で既に50,753冊になっており、前年の1割増しを既にオーヴァーしています。

福　　吉：その増加の何割かは、国際英語学科の Graded Readers が占めているのでしょうか。

村　　上：かなりの比重を占めていると思います。

福　　吉：そういう数字はいろいろな統計上も図書館にとってプラスですよね。

村　　上：そうです。例えば「大学ランキング」などでも、学生ひとり当たりの年間貸出数などをランキングの目安のひとつにしていますからね。5冊以下だと C ランクとか、6冊から10冊だと B ランクとかですね。

2000年度の LSC 貸出冊数が28,835冊でしたから、わずか4年間に2倍になったわけですね。LSC としてもこの間、1万冊以上の本を増やしましたし、従来配架していなかった一番

高い棚や一番低い棚にも配架するなど、学生の目に直接本が多く触れるよう努力しています。また一度に借りられる冊数も、4冊から6冊へ、さらに来年度からは10冊へと増やしていますので、これらも貸出数増加の要因になっているかもしれません。

福　　吉：今日のお話も既に1時間を越えました。皆さん、今日はお忙しいところをありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

（2005年2月22日開催）